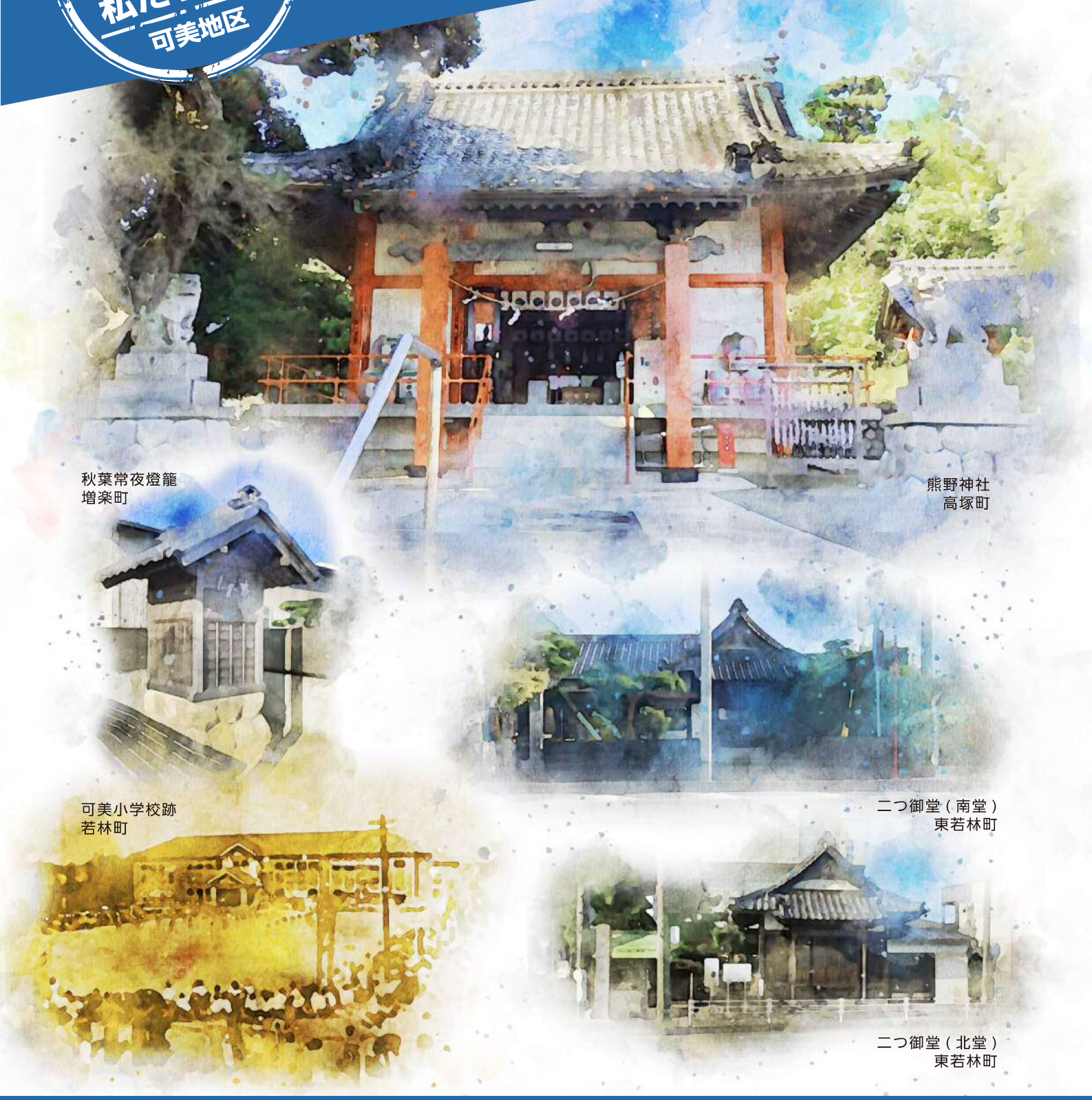
地域愛称マップ

可美（かみ）地区

知って
楽しむ
私たちの街
可美地区



熊野神社
高塚町

秋葉常夜燈籠
増楽町

二つ御堂（南堂）
東若林町

可美小学校跡
若林町

二つ御堂（北堂）
東若林町

南区地域力向上事業

地域愛称マップ

可美（かみ）地区

1 大島山（おおしまやま）

旧可美村の最西北に位置し、高塚の小字「大島」と呼ばれていたところがあります。東西の小高い丘には松や雑木の林が広がり、たいへん寂しい場所であったので、キツネが住み着いたと伝えられています。
昭和の初め、紡織工場の進出により砂山は崩されました。人々は、その地名を愛し、可美団地内の公園を「大島公園」と名付けて親しんでいます。

2 大堀（おおほり）

江戸時代の文久３年（１８６３年）、舘山寺堀江藩主大沢右京太夫（うきょうだゆう）に提出した書類によると、当時の高塚は、旧東海道沿いにわずか１１６戸ばかりのひっそりとした農村でした。
昭和４年（１９２９年）、東海道線高塚駅が開設された当時も寒村そのものでした。高塚駅南口前の東西道路を西へおよそ1.5町（約１５０m）行った辺りは、周囲よりおよそ３間（約５～６m）高い場所があり、その下は水をたくわえた細長い堀であったため、この一帯は昔から「大堀」と伝えられています。

3 お宮の山（おみやのやま）

昔、熊野神社の神主に「境内に土砂を盛り上げて丘を造り住民を救え」という神のお告げがありました。そこで、氏子一同と図って、浜から砂を担いで持ち帰り、神社の裏山に盛り上げていきました。後に安政の大地震（１８５４年）（※）が起きた時に、熊野神社の氏子はこの丘に避難して助かったと伝えられています。今でも毎年元旦に浜から砂を境内に持ち帰り参拝する「浜垢離（はまおり）」の行事が続いています。
※明応の大地震（１４９８年）という説もあります

4 麦飯長者跡（むぎめしちょうじゃあと）

馬子の五郎兵衛がある僧を馬に乗せて宿まで送りました。家に戻ると馬の鞍に僧が忘れたお経とお金を見つけ、返そうと保管していましたが、３０年近く経ってしまいました。再び僧と会うことができ、返そうとしましたが、受け取らないため、その使途を考えた結果、道行く人々に湯茶や麦飯の接待を始めました。
その善行によって小野田の姓を貰い、代々小野田五郎兵衛を名乗り、いつしか長者様、麦飯長者と言われるようになりました。

5 源十道路（げんじゅうどうろ）

国道２５７号（旧東海道）高塚熊野神社参道入口の南側に、小沢渡町方面に行く少し細い道（旧村道）があります。昭和３０年（１９５５年）以前は、高塚・入野方面より小沢渡・倉松町方面へ行く主要な道路でした。しかし、道幅はわずか６尺（約1.8m）しかなく、自動車の通行はもちろんできなかったので、自動車は迂回することになり、たいへん不便でした。
この道路の名前は、高橋源十氏の名前をもらって、名付けられたものといわれています。

6 八幡川路（はちまんかわじ）

昭和３８年（１９６３年）ごろまでは、東西およそ0.6里（約2.5km）、南北およそ４町（約0.4km）の細長い池がありました。この池は「蓮池」と呼ばれ、別名「高塚池」とも言われていました。
蓮池（高塚池）は全体が深い泥沼のため、遊泳はできませんでした。しかし、高塚の八幡川路と伝えられているところは、池の底が白砂で覆われ、砂の間からきれいな冷たい水が湧き出ていました。子ども達を中心に格好の遊泳場となっていました。

7 高札場跡（高塚）・秋葉燈籠跡（こうさつばあと）（あきはとうろうあと）

幕府や領主が決めた規則や掟などを木の札に書き、人目につきやすい場所に掲げて村人達に告知していました。木札は高さ２間（約3.6m）、横１間（約1.7m）、縦0.6間（約１m）ほどありました。
秋葉燈籠は街道の要所に設置されていたものの１つです。江戸時代から秋葉信仰（火防の神）が盛んになり、小さな祠を建てて秋葉神社のお札を祀っていました。

8 高塚学校（たかつかがっこう）

高塚の地蔵院は、早くから庶民の教育に熱心で、子どもたちの多くは寺子屋で読み・書き・そろばんを習いました。
明治６年（１８７３年）6月、地蔵院に敷知郡高塚学校が創立されました。次第に学童も増え、手狭となり、明治１４年（１８８１年）8月、高塚学校は増楽村に新築移転されました。今の可美小学校の前身です。

9 地蔵院（じぞういん）

護法山（ごほうざん）地蔵院は禅宗の一派、臨済宗方広寺派の寺院です。寺伝によると、開山は将軍足利義満の時代、明徳元年（１３９０年）に元道円密和尚によって創建されました。
地蔵院の本尊は腹籠延命地蔵菩薩（地蔵尊）で、江戸時代の宝暦８年（１７５８年）、高塚の小野田五郎兵衛久繁が奉納したものです。この地蔵菩薩は、徳川家康の夫人の築山御前が守り本尊として肌身離さず持っていたものといわれています。

10 四孝女（しこうじょ）

江戸時代の半ば（18世紀半ば）、小野田五郎兵衛久繁という長者（財産家）が住んでいました。しかし、娘夫婦は１４歳の長女おさき、１２歳のおやす、８歳のおかの、６歳のおその４人の姉妹を残し、年若くして２人ともこの世を去りました。
悲しみに暮れていた４人の姉妹は、亡き父母の供養のために五郎兵衛久繁のすすめで仮名法華経の書写に励み、宝暦５年（1755年）より3年かけ法華経２部を完成させました。
現在、地蔵院と小野田家に保存されています。このことを高僧白隠禅師が「八重葎（やえむぐら）」に書いて公表しました。

11 高塚駅（たかつかえき）

明治２１年（１８８８年）に東海道線が開通し、浜松駅、馬郡駅（現在の舞阪駅）が開設されました。
高塚駅は明治４４年（１９１１年）に信号場として設置されていたので、駅が開設されることは村民の長年の悲願でした。大正１２年（１９２３年）に始まった新駅開設の請願運動により、昭和４年（１９２９年）7月１日に高塚駅が開設されました。昭和５２年（１９７７年）駅舎改築。その後、平成２７年（２０１５年）に３代目駅舎が完成しています。

12 浜地通り（はまちどおり）

入野小学校の西側の道路を南におよそ３００m行くと、新川橋という橋がかかっています。この橋の付近には、古くから浜砂が集積した土地があり、人々はこの土地を「浜地」と呼んでいました。この地方に残る習わしに海で体や心を浄める浜おり（浜ごりともいわれた）という行事がありました。

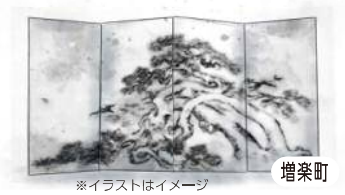
13 釈迦山（しゃかやま）

江戸時代の後期から明治初年にかけて活躍した浮世絵師五雲亭貞秀（ごうんていさだひで）の描いた東海道五十三次の景勝のうち、浜松順路舞坂宿の絵図を見ると、高塚村、増楽村を通っている旧東海道の両側にはきれいな松並木が植えられています。
この松並木と並行して少し北側の小高い松林の山があり、この小山のうち、高塚地蔵院の東南に少し行った地域は昔「釈迦山」と呼ばれ、大変に立派なお釈迦様の像が祀られていました。

14 堀江領境界石（ほりえりょうきょうかいせき）

高塚村は江戸時代、宝永２年（１７０５年）に堀江館山寺に城を構えていた堀江領主大沢右衛門督基隆（うえもんのすけもとたか）の領地となり、明治維新まで堀江領でした。そのため浜松藩との境界には、境界標示の礎石が建てられていました。

15 一揃庵（ひとそろえあん）　音羽の松（おとわのまつ）



福田半香（ふくだはんこう）はかの有名な渡辺崋山の弟子で親交が厚く、崋山蟄居のときは生活援助に労を惜しみませんでした。半香が、たまたま当地を通りかかった時、小沢渡村六所神社境内の名松に絵心を動かされ、松の屏風絵を完成しました。これが「音羽の松」です。
なお、半香が制作に没頭した場所が、小野田五郎兵衛家の離れであり、「一揃庵」と呼ばれ、玄関には「一揃庵」の額縁が掲げられていたそうです。

16 増楽寺（ぞうらくじ）

増楽寺は臨済宗方広寺派大通院の末寺です。天正１８年（１５９０年）５月６日に入寂した明庵円（みょうあんそえん）和尚により開山されました。寺には、明庵和尚が使用されていたという金襴の袈裟が残されており、増楽寺の寺宝となっています。
そのほか、釈迦涅槃図の掛け軸、馬頭観音像などが保存されています。

17 高札場跡（増楽）（こうさつばあと）

幕府や領主が決めた規則や掟などを木の札に書き、人目につきやすい場所に掲げて村人達に告知していました。木札は高さ２間（約３．６ｍ）、横１間（約１．７ｍ）、縦０．６間（約１ｍ）ほどありました。

18 秋葉常夜燈籠（あきはじょうやとうろう）

火防の神、秋葉山への参詣が江戸時代後半から盛んになり、秋葉山に通じる街道に多くの燈籠が残っています。火防のお札を頂いて各家庭に配り、そのうちの１枚を燈籠に納めて火を灯し地区の安全を祈ったといいます。また、街道を往来する人々の道標としても利用されました。

※本地図はイラストマップであり実測と異なります。

19 西洗橋（にしあらいばし）

高塚川改修工事にともないかけられた橋で、可美村誌では架橋年月が昭和４１年（１９６６年）３月となっています。
可美地区の旧東海道（国道２５７号）より南側は沼地が多く、一面に蓮が生えていました。しかし、このあたりの水底は砂地で、常に清水がこんこんとわき出ていました。プールのなかった当時の子ども達の水泳場でもありました。
この澄んだ水は、東の沖洗いに達し、新橋の農家の野菜・農機具の洗浄に大きく役立っていました。

20 みたらしの池（みたらしのいけ）

昭和２２年（１９４７年）１月頃まで、可美小学校運動場の南西辺りに水神様をお祀りした人工の池があり、「みたらしの池」と言われていました。

21 沖洗い（おきあらい）

西南部排水路にかかっている西新橋付近から若林町のあたりは「沖洗い」と呼ばれています。地元の人々はこの西新橋を「沖洗い橋」と呼んでいて、「沖洗グランド」は大切なスポーツの場として愛されています。
このあたりは昔、蓮池が広がり、普段でも湿地の状態で、特に大雨が降ったときなどは歩くこともできず、束ねた藁を道に敷いて、やっと通ることができる状態でした。
この「置き藁」がだんだん変化して「沖洗い」という地名になったといわれています。

22 蓮池（はすいけ）

蓮池は、高塚池（高塚、増楽地内）、蓮池川（若林地内）、沼田池（通称、次郎助池。東若林地内）を総称して呼んだ名称です。浜名郡誌によれば、東西およそ0.6里（約2.5km）、南北およそ4町（約0.4km）、周囲およそ1.5里（約5.9km）の広さであったといわれています。
昔は蓮や 蓴菜（じゅんさい）がたくさん採れて有名で、藻草も豊富でした。
蓮の花が咲くころとなれば、蓮見の宴が開かれ、近郷近在から弁当持ちの蓮見客でにぎわい、ここで採れた蓮根は「高塚蓮根」と呼ばれ、珍重されていました。

23 辻（つじ）

長島街道は、伊場、鴨江、入野、雄踏へとつながる大変重要な生活道路で、戦前は地域の人々ばかりでなく、倉松や小沢渡方面の多くの人々がこの道を通り、行き来していました。春と秋のお彼岸参りやお稲荷様の大祭の時は、遠くからくる人々もこの道を通り、大変な賑わいであったと言います。長島街道と旧村道（東若林～高塚線）の交わるところを村の人々は辻と呼んでいました。辻という字は十字路に交差する道を意味した地点に由来します。

24 桃屋敷（ももやしき）

古来より桃の里として有名で、このあたりを中心に桃の木がたくさん植えられ、「桃屋敷」と呼ばれていました。
桃の咲く季節には近郷近在から多くの人が集まり、宴席も設けられて花見を楽しんだと言われています。

地域愛称マップ

可美（かみ）地区

25 高札場跡（若林）（こうさつばあと）

幕府や領主が決めた規則や掟などを木の札に書き、人目につきやすい場所に掲げて村人達に告知していました。木札は高さ２間（約３.６m）、横１間（約１.７m）、縦０.６間（約１m）ほどありました。

26 可美小学校跡（かみしょうがっこうあと）

明治６年（１８７３年）高塚学校創立後、増楽、若林と校地は変更されましたが、明治４１年（１９０８年）から昭和２２年（１９４７年）まで、この地に可美小学校の前身である若林尋常小学校・可美尋常小学校、可美国民学校がありました。

27 東海道の松並木（とうかいどうのまつなみき）

慶長９年（１６０４年）、江戸幕府は日本橋を起点に五街道を整備し、主要道に松や柳を植えさせました。これによって往来する人々は、道に迷わず、風や日差しを避けたり、休息もできるなど大変便利になりました。可美地区も多くの松並木がありましたが、昭和１５年（１９４０年）頃より高塚から東若林に至るおよそ半里（約２km）の工事により、北側の松は切り倒され、わずか２０数本が面影を残すだけになってしまいました。

28 威徳寺（いとくじ）

威徳寺は臨済宗方広寺派大通院の末寺で、康永２年（１３４３年）に建幢宗立（けんどうそうりつ）禅師が開山しました。寺の過去帳によれば、本尊は延命地蔵菩薩で、安阿弥（あんなみ）大仏師がこれを作ったと記されています。
第６世賢林宗泉（けんりんそうせん）禅師は、永禄８年（１５６５年）、不動尊、毘沙門天を威徳寺の鎮守として迎え、安置しました。境内には不動明王を祀った不動堂や、弁財尊天を祀った弁天堂があり、弁天堂の前には池もありました。また寺の敷地に「叟羅之松」もありました。

29 能済寺（のうさいじ）

永正元年（１５０４年）、高道遠（こうどうえん）和尚が小庵を結んだのがこの寺の始まりであると言われています。境内には２基の古い笠付きの墓碑があり、１つは「霊運院殿泣守倫盛大居士（れいうんいんでんほうかみりんせいだいこじ）」とあり、三河の大崎（現豊橋市船渡町）の城主中島氏の祖、与五郎重次のことです。天正４年（１５７６年）に当寺へ葬られたとの碑文があります。もう１つは重次公より七代後の姫「芳樹院殿義山妙貞大姉（ほうじゅいんでんぎざんみょうていたいし）」の墓です。
大正の初めにお稲荷様を招魂し、特に大祭時には近在からの参詣人で賑わい、寺前の道路には多くの露店が並んだといいます。

30 長島街道（ながしまかいどう）

若林から長島地区を通り、西伊場へ抜ける道で、堀留運河を渡るところに長島橋がかけられています。この道は、可美地区、小沢渡・倉松地区の人々が伊場、鴨江、浜松中心部へむかう道路として利用されていました。
昭和 32 年（1957 年）頃、区画整理事業で道幅が広げられ舗装されたが、以前は幅２間（約 3.6m）ぐらいの細い道で、別名「二間通り」とも呼ばれていました。

31 長島河岸跡（ながしまがしあと）

堀留運河にかかる長島橋の西側に「長島河岸」と呼ばれる船の方向転換する小さな船だまりとなだらかな斜面の荷揚げ場がありました。浜名湖西岸入出方面（現在の湖西市入出）からの瓦や浜名湖で採取した海草（藻）を和船に帆をかけて運び、この河岸で陸揚げしていました。海草は主に倉松、小沢渡方面に牛車などで運搬され、堆肥として使用されていました。また、春と秋の鴨江観音の縁日には彼岸参りをするために多くの人々が蒸気船に乗り、この河岸を利用していました。

32 堀留運河（ほりどめうんが）

この運河は、明治初めに現在の菅原町を起点として浜名湖を渡り、入出村（現在の湖西市入出）まで船が通った「井ノ田川掘割（通称、堀留運河）」です。
明治５年（１８７２年）、静岡藩の浜松勤番頭井上延陵（いのうええんりょう）と同副組頭田村弘蔵（たむらこうぞう）の発案により建設されたもので、二人の名字の頭文字をとって「井ノ田川掘割」と呼ばれていました。
浜松の地は海に面していても船舶の停泊する港がなく、物資の運搬はもっぱら陸上運送に頼っていたが、この運河の開通により、生活用品の輸送や旅人の移動が大変便利になりました。

33 城山遺跡（しろやまいせき）

昭和２４年（１９４９年）、伊場遺跡発掘過程で発見されました。高床倉庫跡や日本最古と言われる神亀６年（７２９年）の具注歴や年代のわかる木簡、土器、唐三彩陶枕（文字を書く時、腕の下に敷いたもの）等が出土し、また敷知郡の郡家があったことから、都との深い関係が理解できます。城山という地名は室町時代末期に曳馬城主飯尾氏の前衛機関としての城柵があったことから名が付いたと言われています。

34 秀衡の松（ひでひらのまつ）

二つ御堂（北堂）の西側に藤原秀衡（ひでひら）公が植えたと伝えられる周囲およそ２丈余（約６m）の古い松の大木がありました。
この松は、秀衡公の愛妾の遺体を埋めたところに秀衡公自身が植えられたものと言われ、明治１０年（１８７７年）頃までは朽木となって存在していました。現在のものは２代目の松です。

35 馬頭観音（ばとうかんのん）

二つ御堂（北堂）の西側に銅板ぶきの小さな堂宇があり、柱に「中馬宿馬頭観音大菩薩（ちゅうましゅくばとうかんのんだいぼさつ）」の木札がかかっています。開扉すると台座の上に、馬頭と宝冠をつけた、三面八臂（三つの顔と八つの腕）の観世音菩薩が安置されています。憤怒（ふんぬ）の相をした珍しいもので、一般には「馬頭観音」といわれています。

36 高札場跡（東若林）（こうさつばあと）

幕府や領主が決めた規則や掟などを木の札に書き、人目につきやすい場所に掲げて村人たちに告知していました。木札は高さ２間（約３.６m）、横１間（約１.７m）、縦０.６間（約１m）ほどありました。

37 二つ御堂（ふたつみどう）

奥州平泉の藤原秀衡（ひでひら）公とその愛妾によって、天治年間（１１２５年）頃に創建されたと伝えられています。
上京している秀衡公が大病であると聞いた愛妾は、京へ上る途中、ここで飛脚より秀衡公死亡の知らせ（誤報）を聞き、非常に嘆き悲しみ、道の北側にお堂（阿弥陀如来）を建て菩提を弔いました。その女人はこの地で亡くなったと言われています。
一方、秀衡公は病気が回復し、帰国の途中、ここでその話を聞き、愛妾への感謝と自分の病気全快のお礼のため道の南にお堂（薬師如来）を建てたといいます。それより、この２つのお堂は「二つ御堂」と呼ばれています。

38 次郎助池（じろすけいけ）

沼田池は、通称「次郎助池」と呼ばれ、東若林の東南の村はずれにありました。池の東は明神野（現在の神田町）、南は新橋・田尻・法枝に囲まれた周囲がおよそ半里（約２km）の大きさで、水藻や蓮が茂った池でした。
この池に、いつのころからか大きな蛇が住み着きましたが、村人にこれといった害を加えないので池の主といわれるようになり、水の神として池に祠を建てて祀ったと言われています。
この池は、昭和３８年（１９６３年）から４０年にかけて、浜松市西南部土地改良区の干拓事業により、水田として埋め立てられました。

39 一里塚（いちりづか）

一里塚とは、街道の両脇に一里（約４km）ごとの印として木を植えた塚をいいます。慶長９年（１６０４年）、徳川家康は嫡男秀忠に命じて、江戸日本橋を起点として、各街道一里ごとに榎や松を植えた塚を築かせました。旅人にとっては里程の目安、籠などの乗り賃支払いの目安、一息入れる休憩所として利用されていました。

40 八丁縄手（はっちょうなわて）

森田から東若林に続く旧東海道の長い畦道（あぜみち）を「八丁縄手（畷）（八丁は約８７４m）」と呼んでいます。この畷は天正５年（１５７７年）に織田信長が、時の奉行に命じて荒れた道路を修復させたものです。その後、徳川家康が大改修をし、江戸時代には諸大名の参勤交代をはじめ、旅人たちの往来が激しい交通路として利用されました。
伊場の坂下にあった鴨江寺の鳥居が、ここから望見された昔は、「鳥居縄手」とも呼ばれていました。

41 鎧橋（よろいばし）

国道２５７号線が堀留川にかかっている橋を「鎧橋」と呼んでいます。平安時代（１０世紀半ばすぎ）、鴨江寺は本山の比叡山延暦寺（ひえいざんえんりゃくじ）に無断で戒壇（かいだん）を設置しようとしました。このため延暦寺の僧兵が大挙して鴨江寺に攻め寄せ、鴨江寺側の軍兵は鎧橋の南から城山付近まで逆茂木（さかもぎ）を並べ一帯の田に水を張り、鎧を着て、橋を守り固めて戦いました。このようなことからこの橋は「鎧橋」と言われるようになりました。

「可美（かみ）」の由来

明治２２年（１８８９年）市町村制の施行により、増楽・若林・東若林・明神野・東明神野・海老塚・浅田・伊場・東鴨江の９村が集まって、浅場村となりました。
明治４１年（１９０８年）に海老塚・浅田・伊場・東鴨江の４村が浜松町に編入され、明治４３年（１９１０年）に入野村から高塚が編入されましたが、「浅」「場」という村名の意義が無くなったため、大正３年（１９１４年）３月１０日当時の浜名郡長で漢詩文に秀でた鈴木七二郎氏が「可美」の２字を選定しました。昭和２４年（１９４９年）明神野と東明神野が浜松市に編入されました。そして平成３年（１９９１年）浜松市と合併し、それぞれの字は町名として残ることになりました。

高塚町（たかつかちょう）

昔、村人が津波の犠牲者を熊野神社の裏山に葬り、たくさんの砂を浜から運んで上に盛り上げました。大きな塚状の墓であったので「大墓（おおつか）」・「大塚」と呼ばれ、いつしか高い塚「高塚」と呼ばれるようになりました。

増楽町（ぞうらちょう）

室町時代、永享４年（１４３２年）９月、六代将軍足利義教（あしかがよしのり）公が駿河（現在の静岡市付近）から京都の館に帰る途中、この北増楽にあった非常に大きくて立派な老松を見て感嘆しました。将軍に随行していた尭孝（ぎょうこう）僧正が和歌に『たが代にか 植えておきなの松が根に けふ顕はるる君が千とせぞ』と詠みました。その後、村人たちはこの松を「於岐奈乃末都（おきなのまつ）」、または「叟羅之松（ぞうらのまつ）」と呼びました。この美しく立派に老いたる松の生えてる土地であるので「叟羅」、そして「増楽」と呼ばれるようになりました。

若林町（わかばやしちょう）

昔から若林は桃の里として知られていました。桃はよく厳冬に耐えて一番先に新芽を出します。冬枯れの若葉のないときに春を告げるとともに、農業の胎動を知らせ、花はなんともいえないほど美しい。特に桃の若葉のころが美しく、この若桃の木が林のようにこの地にあったので「若林」と呼ばれるようになりました。

東若林町（ひがしわかばやしちょう）

今から約３６０年前の寛文３年（１６６３年）に「若林領家」といっていたのが改められ「若領家」となりました。
その後、延宝４年（１６７６年）に若林の東にあるので「東若林」に改められました。

令和3年度　南区地域力向上事業　地域愛称マップ（可美地区）

企画・発行 / 浜松市
（浜松市 南区役所 区民生活課 可美協働センター）

御協力 / 可美地区自治会連合会
・高塚町南自治会
・高塚町北自治会
・増楽町自治会
・若林町西自治会
・若林町東自治会
・若林町北自治会
・東若林町自治会
三浦宏之 氏（元可美村誌 執筆委員）

参考 /
美しかるべき里 愛称標識（可美地区愛称標識設置委員会）
可美村誌（可美村）
美しかるべき里 可美村写真集（可美村）
可美村写真集（可美村）
南区ガイドマップ（浜松市南区役所区振興課）

引用 /
美しかるべき里　愛称標識（可美地区愛称標識設置委員会）
可美村誌（可美村）

デザイン・印刷 /
株式会社クリエイティブプロジェクト・ズーム